

26. 脳梗塞における<sup>123</sup>I-IMP脳血流シンチグラフィー—X線CT,<sup>133</sup>Xe-クリアランス法,  
RI脳アンジオグラフィとの対比— ..... 村松 俊裕他 956  
27. 脳血管障害におけるI-123 IMP-SPECT, とくに神経機能との関連について ..... 百瀬 敏光他 957

## 一般演題

### 1. 巨大な先天性胆道拡張症の一例

小川 富雄 (順天堂大・小児科)  
長瀬 勝也 荒川 佳也 (同・放)

症例は2歳8か月の女児。右上腹部の大きな腫瘍を主訴に来院した。軽度の閉塞性黄疸と白血球增多を認めた。腹部超音波検査、CTにより肝下縁に接した囊腫の所見であった。Tc-PMTによる肝胆道シンチグラムでは1時間後に肝内胆管が描写され、5時間後に大きな囊腫に貯留し巨大な胆道拡張症の診断が得られた。開腹手術により肝外胆管の囊腫が確かめられ332mlの胆汁を有していた。胆道拡張症の診断にRI肝胆道シンチグラムを応用することは、胆道系の確定ができる、経時的に追跡できる、侵襲は少ないなど小児には好適である。一方、肝機能が極度に低下すると描出され難い、解像力に限度があり囊腫型には良いが、拡張の少ない紡錘型では確定の困難なことがある。他法の併用も必要なことがある。

### 2. 各種疾患における食道動態シンチの検討

明石 恒浩 相沢 信行 原 芳邦  
(茅ヶ崎徳洲会病院・内)  
三井 民人 (同・放)  
鈴木 豊 (東海大・放)

<sup>99m</sup>Tc-DTPAとsimple syrupの水溶液を被検者の口に含ませ、15秒ごとに嚥下を繰り返させisotopeの食道通過をcomputer分析し、口咽頭と食道にROIを設けtime activity curveを作成後、Tolinらと同様Ct=(E<sub>max</sub>-E<sub>t</sub>)/E<sub>max</sub>×100の式を用いて通過率と嚥下回数を軸にclearance curveを求めた。食道全体を一つのROIにまとめ、clearance curveにentire esophagealmotilityを反映させた。controlでは8~12回目の嚥下でpeakに到達したが食道炎様症例ではpeak到達のdelay、慢性肺疾患例、脳血管障害例と強皮症例ではpeakに達せず、それぞれ特徴的なdelayed patternを認識した。本検査

法にてsimple syrupを使用し唾液分泌を促進しwet swallowに近い状態とし、より生理性に行えた。口咽頭にROIを設けcurve fluctuationの説明を可能とした。本検査法は多種疾患にscreening的応用が期待できる。

### 3. 心音II音、心電図R波同期平衡時法による心房細動例の心機能評価

立石 修	渡辺 久之	窪内 洋一
吉村 正蔵		(慈恵医大・四内)
橋本 広信	間島 寧興	川上 憲司
		(同・放)
野川 義昭	中村 悟	林 茂利
服部 文夫		(厚木病院・放)
中村 英明	祐乘坊 真	(フクダ電子)

R波同期心プールシンチグラフィーの弱点であった心房細動に対して心電図R波とともに心音II音を同期するR波II音同期プールシンチグラフィーを考案した。方法はR波およびII音同期パルスをコンピューターに入力し拡張末期および収縮末期より30 msecのデータを1,500心拍加算しイメージを作成し駆出分画(EF)を求める。心房細動では心拍出量(SV)が一心拍ごとに異なるため一定の場合と比べて同期イメージは不鮮明であり、その信頼性が問題となる。そこでファンтомを用いSVを一定にした場合と平均SVを前者と同じくしこれより30%の範囲でSVを変化させた場合の左室countの相関をみたところ両者は非常によく相関しSVが変化しても加算して得られるイメージはその平均を示すと考えられた。超音波検査法を用いた検討で平均容量より求めたEFは一心拍ごとに求めたEFの平均とよく一致した。以上より本検査法で求めたEFは一心拍ごとのEFの平均を示すと考えられ左室機能評価の指標として有用と思われた。